

M-6-1-9

資料名 日滿實業協會朝鮮支部開設發會式概況

出所 日滿實業協會

作成年 19350430

寄贈者 編者

受入

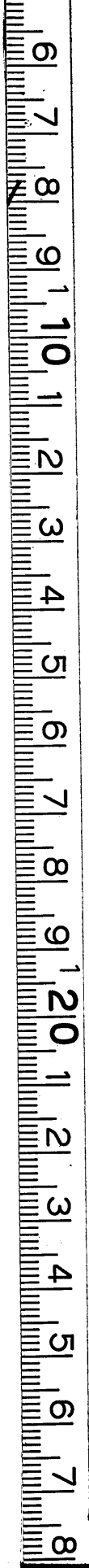
注記 45P 22×15cm

昭和十年四月

日滿實業協會
朝鮮支部開設

發 會 式 概 況

日 滿 實 業 協 會



寄
日滿實業協會
年 日

日滿實業協會朝鮮支部開設發會式概況

昭和十年四月一日午後三時京城商工會議所に於て日滿實業協會朝鮮支部發會式を開催せり。式場は第一會議室を以て充て、評議員、會員は勿論、官民多數の出席あり、左記順序により嚴肅且つ盛大裡に午後四時半終了せり。

一、發會式順序

- 一、開會挨拶 (賀田常務理事)
- 一、會長挨拶 (郷 會 長)
- 一、式 辭 (賀田常務理事)
- 一、祝 辭

拓務大臣

對滿事務局總裁

朝鮮總督

京畿道知事

京城府尹

日滿實業協會滿洲支部常務理事

朝鮮工業協會長

朝鮮貿易協會長

一、祝電朗讀

一、講演 (堂本朝鮮總督府商工課長)

一、閉會

以上

一、賀田常務理事の開會挨拶

本日新年度初めの劈頭に於て日滿實業協會朝鮮支部の發會式を舉ぐるに方りまして、私より一言御挨拶を申し上げますことは洵に光榮に感ずる所であります。

閣下並に各位には御多忙の折柄にも拘らず多數御來臨の榮を賜りましたことは、協會並に當支部の感謝に堪へない所であります。殊に本部より篠崎常任幹事が態々來會せられたることは我等の衷心より感謝する所であります。

御承知の通り日滿實業協會は昭和八年八月大連に開催されました滿洲大博覽會主催の日滿實業懇談會に於きまして、東京商工會議所より提案のありました滿洲國經濟建設協力に關する決議並に日滿實業協會設置案が具體化したものでありまして、日本商工會議所が主として之が中心となつて斡旋の勞に當り同年十一月十八日東京にて創立總會が開催され、目出度設立致しましたのであります。同協會は日滿兩國の經濟提携を促進し、

滿洲國の經濟建設を支援し、兩國の共存共榮を圖る事を目的と致して居りまして、其の當初に於きましては種々の事情から本部を東京に置き支部を新京（事務運用上第一着大連）に置くことに決定したのであります。然し朝鮮と致しましては日滿間の中間に位置し、本協會の目的遂行には重大な役割を演じなければならぬのでありますから、是非共支部設置の緊要なることを痛感せられ、爾來本部に對し機會ある毎に主張し且つ本部よりも格別なる關心を與へられた譯であります。幸ひ昨年十一月三十日の總會に於きまして滿場一致昭和十年度から朝鮮支部が設置せらるゝこととなり、本日をして其の發會式を擧ぐるに至つた次第であります。本協會は創立後僅かに一年有半を経過したるに過ぎないのであります。現在會員と致しましては昨年十一月現在日鮮滿の主なる商會議所、滿洲國の商會、工會及之に準ずる團體二百二十八、組合十三、銀行、會社四百二十七、個人會員二百七十四名合計九百四十二の有力なる會員數を有するに至り、尙逐日増加しつゝあるのであります。其の内朝鮮に於きます會員は現在百一名（百九

十四口）に達して居りますが、朝鮮支部開設後は滿洲國經濟直接關係のみならず、國策上且つ國際上の高所の見地より發して加入者は追々増加するものと思ふのであります。又増加の必要を感じずる次第であります。

他面當日滿實業協會は會員同士の協力と日滿兩國政府當局の御幫助に依りまして、創立後日淺しと雖も呼應して着々仕事を進め、各般の問題に關し調査研究を進め其の結果は權威ある印刷物となつて相互の知識を弘め、社會に發表し、尙ほ必要なるものは要路に建議し、若くは日滿實業家相互の親睦接觸に便する等頗る順調なる發達を見、官民各方面よりも期待と重視とを荷ひ、以て日滿兩國經濟提携に重要な使命を擔ふに至りましたことは洵に御同慶に堪へぬ次第であります。

朝鮮支部の事務所は朝鮮商會議所内に置き逐次陣容を整へたいのであります。どうか何かと一層の御支持、御鞭撻を賜はりたいことを此の機會に於て特に御願申上げる次第であります。

三、郷協會長の挨拶

六

本日茲に我が日滿實業協會朝鮮支部開設式を舉行せらるゝに當り、協會長として私が親しく來會各位に御挨拶を申し述べべきであります。止むを得ざる事情の爲め其意を得ず、乍不本意一言蕪辭を呈して之に代へ併せて支部開設に對し聊か祝意を表したいと存するのであります。

御承知の如く我が日滿實業協會は一昨年十一月創立し、爾來日を閲する事未だ一年有半にも充たないのであります。幸に日滿兩國政府當局の御懇切なる御指導と兩國實業家の熱心なる御後援に依り、今日に於きましては會員數も日滿兩國に互りて相當多數に達し、日滿兩國經濟提携に關する有力なる機關として認めらるゝに至りました事は御同慶に堪へない次第であります。滿洲に於きましては當協會本來の性質上創立當初より支部を設置し來つたのであります。朝鮮に對しては今日まで其の運びに至らなかつ

たのであります。然るに朝鮮は滿洲國と相接壤し經濟上頗る緊密なる關係に在るの故を以て、朝鮮に於ける本協會關係者は夙に朝鮮支部設立の希望を抱懷せられて居たのであります。殊に昨年夏以來朝鮮に於ける會員の増加と共に支部開設が非常に熱望され、去る十一月の定期總會に於て滿場一致昭和十年度より朝鮮支部開設の決議を見るに至つたのであります。其の間朝鮮商工會議所賀田會頭を首め理事者諸君の御努力御斡旋に對して衷心より感謝措く能はざるものと同時に、多數會員諸君の熱誠なる御贊助御後援に對して厚く謝意を表するものであります。就中京城商工會議所副會頭にして本協會理事でありました故平井熊三郎氏は支部設置に付大に貢獻されたのであります。不幸旬日前長逝され、本日此の式場に見えることの出来ないのは甚だ遺憾とする所でありまして、此の機會に同氏に對する敬意と哀悼の意を表したいと存するのであります。

申す迄もなく本協會が其の使命を遂行するに當りましては當該理事者の御努力を緊要とするは勿論であります。之と同時に官民各方面の御指導御援助に俟たなければなら

七

ぬ事は私が申上ぐるまでもない事で御座います。各位に於かせられましたは此の意味に於て今後一層の御指導を相賜はりまする様此の上共切に御懇請申し上げます。

惟ふに日滿兩國の經濟提携日滿兩國國民の懇親融和を圖りまする事は極めて緊要の事でありまして、又本協會の使命とする所でありますが、之が實行に當りましては種々困難なる事情の伴ふ事あるも交止むを得ない次第と存じます。然しながら要は有無相通ずるの自然の大原則に基き、兩國の共存共榮、東亞和平の大局より達觀し、部局的利害に拘泥する事なく、公正妥當なる方策に依りて不斷の努力を措まざるに於ては臆て終局の目的を達成すること必ずや難きに非ざる可きを信ずる者であります。

我國の滿洲國に對する國策は牢固不動のものが定つて居るのであります。そうして近く日滿經濟會議も興されんとして居るのであります。而しこ又滿洲國に於ける軍事及び政治上の施設意想外に進捗し、治安維持も大に確保せらるゝに至りて、茲に經濟工作の時代と進み來つたのであります。此の時に於て一方北鐵讓渡交渉も愈々成立を告げ、延

いては日滿露經濟關係も好轉の機運に向はんとして居り、他方日滿支の關係も幸に一轉期を劃せんと見らるゝ情勢に向ひつゝありまして、滿洲を中心として各般の經濟事情は漸く多事多端ならんとして居るのであります。此の秋に當り本協會は滿洲國經濟建設の爲めに大に協力し、以て此の時局に對處しなければならぬと信ずるのであります。

斯く觀じ來りますれば、我が日滿實業協會としても次より次へと益々繁く、各種の問題に逢着しまして、其の責任の大なるを痛感するのであります。御承知の如く朝鮮に在りては最近異常なる經濟的進展を遂げ、内鮮滿の關係は一層緊切なるものがあるのです。此の時に於て朝鮮支部の開設は洵に機宜を得たるものでありまして、今後朝鮮支部は本部は勿論、滿洲支部とも聯携を保ち、朝鮮の經濟發達は勿論、内鮮滿の共存共榮に貢獻さるゝこと尠なからざるべきを思ひまして、甚だ慶賀に堪へないのであります。聊か所見を述べ御挨拶に代へ、併せて朝鮮支部開設に對し祝意を表する次第であります。

昭和十年四月一

日滿實業協會々長 男爵 郷 誠之助

(篠崎常任幹事代讀)

一〇

四、賀田常務理事の式辭

本日日滿實業協會朝鮮支部發會式を擧ぐるに方り、閣下並に各位の御來臨を得たるは本會の最も欣幸とする所なり。

惟ふに日滿經濟提携と云ひ、日滿產業統制と云ふも畢竟兩國密接不可分の關係を意味し、緊密なる親善協力を實現するを以て根基と爲すや論を須たず。本協會は即ち此の見地に立脚し日滿兩國實業家の親善融和に寄與し進んで日滿の經濟提携と滿洲國の經濟建設とに貢獻せんとするの趣旨の下に昭和八年十一月設立せられ爾來適切なる事業を遂行しつゝありて殊に日本商工會議所を背景とし滿洲人の商會、工會を包容し滿洲國政府、軍部、滿鐵等よりも重視を受け民間機關としても最も有力且つ權威ある性質を有するに

至れり。今や滿洲國も治安の維持着々回復に赴き經濟工作に移らんとするの時機に際し、日滿兩國經濟提携上重要な連鎖的位置を占むる我朝鮮に同協會支部の設置を見るは鮮滿經濟の進展上洵に同慶に堪へざる所なり。

而も朝鮮の産業は駸々として發展し滿洲國との提携を望むや切なるものあり、會員諸君は深く本支部創立の精神を諒せられ本協會の使命達成に向つて邁進戮力せられんことを切望に堪へず。

聊か所懷を述べて式辭とす。

昭和十年四月一日

日滿實業協會常務理事
朝鮮商工會議所會頭 賀 田 直 治

五、祝 辭

拓務大臣の祝辭

今回日滿實業協會朝鮮支部を設立せるは日滿兩國實業の提挈を密接圓滿ならしむる所以なりと信し、茲に慶賀の意を表す。

昭和十年四月一日

拓務大臣 兒 玉 秀 雄

(吉田仁川商業會議所會頭代讀)

對滿事務局總裁の祝辭

日滿實業協會御活躍の狀況は私共平生より伺つて居る通りであります。今回日本内地と滿洲本土との楔とも謂ふべき朝鮮にも其の支部を設置せられ、益々本格的活動に入

られますことは本協會の使命に鑑み極めて有意義と申さねばなりません。今や滿洲國建國以來三年有餘日滿一體不可分の關係は益々緊密に、兩國の國交は益々親密を加へ、本春には滿洲國 皇帝陛下の日本國御來訪を忝ふするの秋に當りまして、日滿兩國民の最も期待する經濟上の福祉増進に關し特別なる關係を有せらるゝ各位が、此の種努力を傾倒せられますことは邦家の爲め喜に堪へない所であります。茲に日滿實業協會朝鮮支部發會式に當り、貴協會の積極的努力と御發展を祈り祝辭に代へたいと思ひます。

昭和十年四月一日

對滿事務局總裁 陸軍大將 林 銑 十 郎

(大内朝鮮軍經理部長代讀)

朝鮮總督の祝辭

茲に日滿實業協會朝鮮支部發會式を舉行せらるゝに當り、所懐の一端を述ぶるを得るは最も欣幸とする所なり。

惟ふに滿洲は我が朝鮮と接壤の地にして、地理的に將た歴史的に密接不離の關係に在

り、殊に滿洲國の創建以來其の交渉聯繫は一層緊密を加へ滿洲に於ける治安の平定、政治經濟等諸般の機構の整備擴充に伴ひ、彼我物資の交易は著しく旺盛を示すに至れり。今や世界の國際情勢は異常の變調を來し各國間ブロック經濟の對立抗爭の益々激化せんとする傾向あるに對し、日滿經濟の融合提携を圖るは喫緊の急務とせざるべからず。此の秋に當り鮮内有力實業家多數を糾合して、日滿實業協會朝鮮支部を組織し、日滿の經濟提携を促進し、滿洲國の經濟建設に協力し、以て兩國の和親共榮に資せんとするは、洵に時宜に適したる計畫と謂ふべく、慶祝に堪へざる所なり。

冀くは會員諸氏協會の本旨に鑑み、協心戮力して其の事業に當り、以て所期の目的を達成せられんことを。

些か蕪辭を述べて祝辭と爲す。

昭和十年四月一日

朝鮮總督 宇垣 一成

(堂本商工課長代讀)

京畿道知事の祝辭

本日茲に日滿實業協會朝鮮支部開設の發會式を舉行せらるゝに至りましたことは、日滿兩國の爲、洵に御同慶に堪へない次第であります。

由來滿蒙の地は我が國と相壤して地理的に密接不可分の關係にあるばかりでなく政治、國防、産業、經濟の各般に互り相互に依存共立すべき必至の運命にあつたのであります。曩に新興滿洲國の獨立を見ましたことは、益々此の關係を緊密ならしむるものであると思ひます。

惟ふに滿洲國は地域廣大であり無限の資源を蓄藏する未踏の寶庫であります。之が開發拓植の實を擧ぐることは、一に以て日滿兩國の提携協力に俟たねばならないのであります。日滿實業協會は實に此の見地に立脚致しまして設立せられたものであり、その使命と致します所は、兩國實業家の融合提携を促進し、進んで日滿經濟制に依りまして、

兩國の共存共榮を實現せしめんとするものであります。而して日滿實業協會が更に滿洲國と一葦帶水の間にあつて其の關係、特に緊密である吾が朝鮮に支部を開設致し、兩國の親善協力を促せしめやうとすることは、洵に時宜に適した施設であり其の效果の多大なるを想ひ、兩國の爲、慶祝に堪へない所であります。

茲に本協會支部の前途を祝福致しますと共に、克く其の重大なる使命を完ふせられんことを望んで已まない次第であります。

昭和十年四月一日

京畿道知事 富 永 文 一

京城府尹の祝辭

此度日滿實業協會朝鮮支部の組織成り、本日の佳辰を卜し其發會式を舉行せらるゝに至りましたことは、日滿兩國の爲に洵に慶祝に堪へざる所であります。

曩に我帝國の多大の犠牲を拂つて滿洲國の建設を援助し、更に之が爲に國運を賭して

國際聯盟會議に争ひ、遂に聯盟脫退を敢行する至りました所以のものは、蓋し滿洲國の儼然たる存在は、獨り在滿三千萬民衆の幸福であるばかりでなく、我帝國の存立上、將亦東洋平和の確立上、必要缺くべからざる爲であることは今更申すまでもありません。幸にして滿洲國は建國以來諸般の施設着々として整ひ、王道樂土の建設に向つて一步一步健實なる歩みを致して居りますものゝ、建國後僅に四星想を経たるに過ぎずして、治安の維持漸く成れるも、富源の開發産業の進展、其他の文化的向上を計り、名實俱に備はる獨立國となり眞に頼み甲斐ある友邦たるの實を擧ぐるに至るには尙前途遼遠の感がないでもありません。従て今後日滿兩國民の一層の提携協力の心要を痛感する次第であります。殊に所謂「ブロック」經濟對立の傾向益々激しからんとする今日、愈々國際聯盟脫退の效力發生し、我帝國は滿洲國と共に世界の表に孤立することゝなり盛衰興廢の運命を同ふするの立場に置かれたのでありますから、日滿兩國民は今後一層精神的に融合し、經濟的に結合し、所謂物心兩方面に於て密接不離の關係を結ぶことは、兩國の共

存共榮を計り、東洋の平和を確立する所以であると確信する次第であります。此秋に當り日滿實業協會は日滿經濟の提携を促進し、滿洲國の經濟建設に協力し、兩國の共存共榮を圖るの使命を以て創立せられ、本日亦滿洲國と接壤し極めて密接の關係にある我半島の地に其支部の發會を見るに至りましたことは、誠に時宜に適し極めて有意義でありまして、衷心より御慶び申上ぐる次第であります。

關係者各位に於かせられましては何卒本會設立の趣旨と本支部設置の重要性に鑑み、協力一致其使命達成に邁進せられ、日滿兩國の健全なる發達と、東洋永遠の平和確立に貢献せられんことを切望する次第であります。

聊か所懐を述べて祝辭と致します。

昭和十年四月一日

京城府尹 伊達 四雄

日滿實業協會滿洲支部常務理事の祝辭

茲に日滿實業協會朝鮮支部の創立發會式を舉行せらるゝに方り、祝辭を述ぶるを得るは予の欣幸とする所なり。

抑も日滿實業協會は日滿兩國の經濟提携を促進し、滿洲國の經濟建設に協力し、兩國の共存共榮を圖る崇高なる目的を遂行せんがため、昭和八年十一月東京に於て創立總會を開催し、次で滿洲支部を設置し、爾來一年有半着々兩國經濟の進展提携に邁進しつゝあるは慶賀に堪へざる所なり。

今や日滿經濟界の飛躍は隆々たるものあり、然も北鐵の接收完了は全滿の天地に一段の明朗性を加へ、其の劃期的新情勢は愈々本協會の使命に重要性を加ふ。此の秋に際し朝鮮支部の設立を見るに至る、寔に好個の企劃として深く之を賛する所以なり。

夫れ朝鮮は壤地を滿洲大陸に接し、又東蘇と密接の關係あり。其の我が國に於ける地

位たる尋常のものに非らざるを知る。蓋し日本の對滿提携は朝鮮をも其の重要な一系路とするや勿論にして、今や朝鮮と滿洲とは貿易の伸張、金融、運輸、拓殖機關の統一等、彼此の接觸漸く繁を加へんとす。相扶けて相互の開發に資するは勿論、鮮滿の經濟的範圍の擴張を容易にし、進んで日滿兩國の國運發展に備ふるは、洵に一日を緩うすべからざらんことに屬す。朝鮮支部の創立は實に機に乗ずるものにして、開發提携に多大の効果を擧ぐべきや敢て呶々を要せざるなり。

茲に朝鮮支部の設立を祝福すると共に、相率ゐて目的の達成に惕厲邁進せられんことを翹望して已まず、一言蕪辭を述べて祝辭とす。

昭和十年四月一日

日滿實業協會滿洲支部常務理事
大連商工會議所會頭

高 田 友 吉

(田淵東拓理事代讀)

朝鮮工業協會長の祝辭

陽春の佳日を下し、茲に日滿實業協會朝鮮支部の發會式を擧げらるゝは、洵に慶賀に堪へざる所なり。

由來朝鮮と滿洲とは地理的に接近し、歴史上緊密なる關係を有するのみならず、近時兩地の政治、交通並に經濟等の關係は、特に密接の度を加ふるに至れり。此の時に當り、日滿經濟の提携を目的とせらるゝ日滿實業協會が當地に支部を設置せらるゝに至りたるは、洵に當然の事と謂はざるべからず。

今や滿洲國に於ては、帝政實施せられ國礎愈々固く庶政其の緒に就きたりと雖、同國の健實なる發達は各種産業の開發に俟つもの甚だ多し。希くは日滿實業協會當地支部は其の設立の趣旨に基き十分機能を發揮せられ、鮮滿兩地の經濟發展と共存共榮とに寄與せられんことを。

一言所懐を述べて祝辭に代ふ。

昭和十年四月一日

社団法人朝鮮工業協會長 加藤敬三郎

(田川副會長代讀)

朝鮮貿易協會長の祝辭

日滿實業協會朝鮮支部發會式に際し、一言祝辭を陳ぶるは寔に光榮とする所なり。

由來日滿關係は歴史的に、將又地理的に、密接不離唇齒輔車の關係に在り。之が共存共榮は實に東洋平和の根基にして、我帝國が曩に日清日露の兩役に於て國運を賭して戦ひたるも全く以上の理由に基くものと信ず。然るに一時兩者の關係著しく惡化し、憂ふべき状態に陥りしも、昭和七年萬邦協和を理想として新に滿洲國家建設せらるゝや、諸般の狀勢遽かに好轉し、兩者緊密なる提携の下に其の理想の實現に邁進し來り着々其の

實效を收めつゝありと雖も、東亞永遠の平和は、日滿兩國々民相互の深き理解と固き握手なかるべからず。

曩に兩國の有力なる實業家は、此所に思を致し、日滿實業協會を設立し兩國の親善經濟の提携に協力し來りたる所、今回滿洲國と接壤の地、朝鮮に支部を開設し其の使命の達成に貢獻せんとするは、最も機宜に適したる有意義の施設にして、慶祝に不堪ところなり、茲に聊か蕪辭を陳べて祝辭となす。

昭和十年四月一日

社団法人朝鮮貿易協會々長 加藤敬三郎

(戸嶋副會長代讀)

六、祝電朗讀

常任幹事 伊藤 正 懋

貴部ノ發會ヲ祝シ尙御發展ヲ祈ル

慶尙北道知事

謹ミテ朝鮮支部開設ヲ祝ス

全羅南道知事

日滿實業協會朝鮮支部ノ開設ヲ祝ス

咸鏡北道知事

日滿實業協會發會式舉行ニ際シ滿腔ノ祝意ヲ表ス

全羅北道知事

日滿實業協會ノ發會式ヲ祝ス

江原道知事

朝鮮支部ノ發會ヲ祝ス

忠清南道知事

日滿實業協會朝鮮支部ノ發會ヲ祝シ將來ノ御發展ヲ祈ル

忠清北道知事

發會式ノ御盛大ヲ祝シ併セテ實業界發展ノ爲メ御盡瘁アラシコトヲ祈ル

平安南道知事

朝鮮支部ノ開設ヲ祝シ將來ノ御發展ヲ祈ル不肖本日ノ開設式ニ參列シ得ザルヲ遺憾トス
宜敷御傳ヘヲ乞フ

日滿實業協會副會長 結城 豊太郎
日本興業銀行總裁

本日朝鮮支部開設式ヲ舉行サルルニ當リ萬腔ノ祝意ヲ表シ併セテ將來ノ御健闘ヲ祈ル各
位ニ宜敷

日滿實業協會常務理事 中野 金次郎
東京商工會議所副會頭

日滿實業協會朝鮮支部開設ヲ祝シ今後ノ御發展ヲ祈ル

日滿實業協會常務理事 片岡 安
大阪商工會議所副會頭

日滿實業協會支部開設ヲ祝ス

大阪商工會議所

謹ミテ朝鮮支部ノ御開所ヲ祝シ併セテ各位ノ御健闘ヲ祈ル

日滿實業協會理事
橫濱商工會議所會頭

有 吉 忠 一

貴支部ノ開設ヲ祝シ各位ノ御奮闘ヲ祈ル

神戸商工會議所會頭

支部ノ御開設ヲ祝ス

京都商工會議所會頭

貴支部ノ御開設ヲ祝シ今後ノ御發展ヲ祈ル

博多商工會議所會頭

支部ノ御開設ヲ祝シ併セテ將來ノ御發展ヲ祈ル

協會理事新潟商工會議所會頭

貴所御開設ノ盛式ヲ祝ス

門司商工會議所會頭

日滿實業協會朝鮮支部ノ開設ヲ祝ス

釜山會議所香椎會頭

發會式ヲ祝シ將來ノ御活動ヲ切望ス

仁川商工會議所吉田會頭

日滿實業協會朝鮮支部ノ開設ヲ祝シ併セテ將來ノ御發展ヲ祈ル

元山商工會議所杉野會頭

日滿實業協會朝鮮支部ノ開設ヲ祝シ併セテ健全ナル發展ヲ祈ル

平壤商工會議所會頭

支部發會式ヲ舉行モラルルニ當リ遙カニ御盛典ヲ祝ス

木浦商工會議所會頭

本日ノ發會式ヲ祝シ併セテ將來ノ御發展ヲ祈ル

清津商工會議所會頭

御盛會ヲ祝ス

群山商工會議所會頭

支部開設ヲ祝シ御努力ヲ謝ス

開城商工會議所金會頭

支部發會式ノ御盛典ヲ祝ス

大田商工會議所會頭

朝鮮支部發會式ヲ祝ス

咸興商工會議所會頭

發會式ヲ祝シ併セテ機能發揮ヲ祈ル

新義州商工會議所會頭

御盛會ヲ祝ス

大邱商工會議所

七、講 演

朝鮮總督府商工課長 堂 本 貞 一

七、講 演

朝鮮總督府
商工課長 堂 本 貞 一 氏

本日私に何か出て喋れといふ御申聞けでありましたが、素人の私が經濟問題に就いて、お歴々の前で話するといふのは甚だ烏滸がましいことで、お断りしたのでございますが、たつて何か喋れといふことで、御引受したやうな次第であります。併し大分時間も経ちまして、お勞れの所でございますから、三十分ばかり時間を拜借致しまして、思付いたことを申し上げたいと思ひます。

日滿實業協會の朝鮮支部がこゝに出來ましたことに付て、各方面からお祝の言葉がありました。その御言葉の中に、本支部の出來ましたことが正に出來なければならぬやうな氣運に乗つて出來たものであるといふことに付きまして、縷々どの祝辭にもありませんので、重ねて申し上げますが、唯朝鮮の地位といふものが如何なる地位にあるかに付きまして、思付きました點を先づ申し上げたいと思ひます。

申す迄もなく朝鮮は滿洲の東の方に出てをる半島でありまして、地圖を御覽になりますれば一目し

て分りになるやうに、島國日本内地と、滿洲との間の梯子のやうな形を成してをるのであります。この地理上の地位といふものが歴史的に反映致しまして、——こゝで歴史の話を申上げるのは甚だ烏辭がましい次第でございますが、大勢を見ますと、朝鮮といふものを日本内地・滿洲・朝鮮と並べて申しますれば、朝鮮は一つの別個のものとして觀念せられるのであります。過去の長い歴史を振り返つて見まするといふと、島國日本の非常なる影響を受けた南朝鮮の文化的の勢力が北の方に擴大致されて見まして、只今の大同江を越えて、平安北道の境に迄行つてをつたといふ風に窺はれるのであります。又アジア大陸の文化的の勢力が朝鮮に浸潤致しまして、政治的の實力と迄なつて、朝鮮に蟠踞致しましたその形勢は、南の方は忠清道を越えて慶尙道の境に迄來た場合がある。殆ど朝鮮の全道を南北の兩方から文化的に政治的に考察致しまして、正に今日の日滿提携のその姿といふものは、朝鮮に於て膠で貼付けたやうな形になつたと考へられるのであります。現に只今でも朝鮮北部の人は、只今の滿洲の土地を自分達の本當の祖國である、故郷であるといふ風に觀念してをるのであります。この事柄は唯單に斯様に申しますばかりでなく、歴史から見まして正にその通りであります。唯こゝに考へなければなりませんことは、大陸の勢力が朝鮮に及び、又政治的の實際の勢力となつて、朝鮮に蟠踞致しましたその姿は、必ずしも今日の所謂滿洲の勢力が朝鮮に及び、滿洲の政治的の力が朝鮮

に確立した時代があるといふばかりでなく、或は元、或は漢、只今の中國又は蒙古、それらの勢力が朝鮮に及んで參り、それで遂に日本内地の島國の沿岸に迄進出して來た場合もありましたので、この滿洲・朝鮮・日本の三つを別々に考へ、又これを一つの連鎖として考へます場合に、滿洲は正にアジア大陸の一部であつて、一つの離れたものでないといふ状態であつたのであります。この事柄が今日から以後の滿洲と日本との關係を考へる上に、從來と變つて考へなければならぬ點と思ふのであります。即ち滿洲は過去に於て東アジアの一部であり、又近き過去に於きましては中華民國の一部であつたのであります。斯様な大きな單位の一部として我が帝國と接觸して居つた關係と、今日滿洲が一つの新たなる國家としてそこに立つたといふ關係とは、分別して考へなければならぬことと思ふのであります。唯單に朝鮮は滿洲と接壤の地である、歴史的にも經濟的にも昔から非常な密接な關係にあつたといふだけで、それだけでも島國日本内地と滿洲とを繋ぐ爲に、朝鮮の立場といふものは極めて重要な地位にあつたのであります。こゝに滿洲國が中華民國から離れてあすここに一つの獨立國として立つたといふ關係に於て、更にその大切さが一層増したことを考へなければならぬと思ふのであります。

何故さういふことを言ふかと申しますならば、今日我が帝國の世界に臨んで參ります理想としてを

る所は、唯單に滿洲とだけ緊密不離の關係に於て手を握つて行かうといふ小さな考でなく、更に中國とも、遠くソヴェートとも、大きくアジアの全體を打つて一丸として、更に世界に臨んで行くといふ風な、大きな理想を持つてをるのでありますが、何分にも双方の感じ氣持といふものがびつたり参りませぬ。滿洲も過去に於て中國の一部として日本に臨みました際には、甚だ日本と致しましても快からぬ氣持を持つて接觸しなければならぬ状態が引續きまして、遂にこの状態を打開するといふ爲に、滿洲事變が勃發するやうな形勢になつた。此事柄はよく振返つて見ますならば、アジア大陸を目標にして進んで行くにしても、先づ滿洲國との間に本當の結成が出来て、その結成に依つてこれが立派に出来るといふことに依つて、更に歩武を進めて行くことにならなければならぬと思ふのであります。

その間にありまして、朝鮮は先程も申しましたやうな歴史的の關係を持ち、殊にその特色として勝れたものを持つてをる。滿洲に行つて向ふに行つてをる朝鮮同胞の爲の仕事をしてをつて痛切に感じたことは、大陸の人々には到底我々島國の人間の眞似の出来ない立派な點があります。併しながら又大陸であるが故に斯様になつたであらうと思はれる缺點も非常にあります。所で朝鮮の同胞の状態を見ると、大陸の人に比較すれば非常に島國的であります。又島國の日本内地の人に較べますと大陸

的であります。この兩者を折衷したやうな性格を持ち、又色々の働きに於て折衷したやうな状態にありまするものが眞中にあつて、兩者を結ぶといふことは、唯離れてをるものが遠くから握手するよりも、更によく密着することが出来ると思はるのであります。この點に於きましては朝鮮半島の特色が日滿を結ぶ上に非常に重要なものありといふことを考へるのであります。

滿洲國が建國せられた其政治上の意義に就いては、既に各方面で聲高く唱へられまして、重ねて私がかゝりて申述べる必要もないかと思ふのであります。新たにこゝに滿洲國が出来たその經濟的の意義はどうであるか、この點をはつきりと考へて行くことが、日滿經濟の提携をやつて行く上に非常に重大な點ではないかと思ふのであります。從來の滿洲の經濟は、滿洲獨立の經濟でない、滿洲としてそこに一つの國民經濟が立つてをつたのではない。從屬的の經濟である、中國に從屬してをつた經濟である。而もその從屬性は非常に大きな役割を持つて從屬してをるのではなくて、寧ろ滿洲の精銳は長城を越えて、西の方中原に志を得て、こゝに清朝を打立て、滿洲は脱殻になつたやうな状態にあつたのであります。それを清朝と致しましては、自分達の發祥の地として、これを大切に保つて行きたいといふ考から、鎖國的な、地域を封鎖するやうな政策を執りました爲に、只今の滿洲國の領域になつてをる地域の經濟開發は、必要が少い爲に非常に遅れて、寧ろ嘗て盛んであつた時代から見る

と退化し、見方に依つては墮落したといふ風に見られるのであります。併し如何に發祥の地として大事に守つてを つても、經濟的に開發が出来ないならば、寶の持腐れになり、再び歸るやうな場合に於ても、自分達が歸つても、自分達を養ふだけの資力も、資源の開發も出来てをらぬといふことになることを恐れました、これが開拓を致します爲に、中國から人を召いて、所謂國內の移民政策を實施致しまして、開發しやうとしたのであります。でありますから、今日の滿洲の地域を、所謂支那と政治的に一體であつた時の滿洲として見ますならば、中國から見れば、滿洲は一種の植民地であります。その植民地も非常なる開發をされた植民地ならば宜しうございしますが、極めて貧弱なる植民地である。

斯様な從屬的關係にありまして、而も滿洲に於きましては皆様方先刻御承知の如く、事變前迄搾取をこれ事とする軍閥が、總ての方面に亘つて：行政のみならず經濟の凡ゆる方面に亘つて、自己の搾取を中心とした統制を持つてをつた。斯様な滿洲國であります。その事柄を一例を以てお話し上げまするならば、滿洲事變が起りましたから建國後に於きまして、まだく反滿抗日の策動が絶えませぬので、我が軍隊は熱河を經略しなければならぬといふので、熱河に進出し、遂に長城の線迄出たのであります。出て長城線を越えることは、國際聯盟に對する關係から聲明致しました所にも背き、如

何にも我が帝國の信義を疑はれる虞がありましたので、せめて熱河經略をやつても、長城は越えたくないといふ腹があつたのでありますけれども、現實に熱河を經略して、長城の線迄出て、背後を振返つて只今の滿洲國の領域になつてをる長城以内を見れば、物資も極めて貧弱であるし、適當なる部落もないといふ都合で到底折角進出した兵をそこで休養さす餘裕がない。而も長城線迄出張つて、何時反撃して來るのか分らぬ敵に對して、長城線で頑張ることは、兵を勞するのみで、敵の反撃を受け、徒らなる損害を繰返さなければならぬといふ状態であることを察しまして、長城を越えた。長城外には相當の物資もあり部落もあり、兵を休養させることが出来るからといふので、停戰協定に於きまして、長城外に兵を置いて、而も停戰區域、不戰地域を決めたやうな次第でありまして、この事柄が滿洲が如何に經濟的に、過去に於ける中國との關係から、殊に王朝以來のやり方から貧弱な状態になつてをるといふことが窺はれるのであります。政治的滿洲が中國の一部であつたのみならず、滿洲國の經濟なるものが既に中國に從屬した經濟關係にあつた、而もその經濟は非常に貧弱である。從屬と申しましても豊富なる資源の開發を致しまして、本國に貢ぐ、即ち本國の經濟を潤澤にする爲に、所謂立派な子供が親に貢ぐといふ立場にあるのなら宜しいのでございますが、非常に貧弱な状態に於て從屬してをる。而もその頭には唯搾取を事とする軍閥が蟠踞してをつた。これが滿洲の經濟状態であ

つた。そこに滿洲國が建國されたといふことは、中國との從屬性を離脱して、滿洲獨立の國民經濟をここに打立てるといふ、新しい歴史に一步を踏出した譯でありまして、之は政治上の意義と等しく、極めて重大なることとして、私共は考へなければならぬと思ふのであります。

それと同時に滿洲内に於きましては、從來搾取を事とする軍閥が拂退けられまして、王道主義に依る大衆の福祉増進を趣旨とする政治が行はれ、經濟も正に本當の近代的の意味に於ける國民經濟といふものが滿洲に打立てられ、そこに基礎が出来た。斯様にして初めて滿洲三千萬の民衆が新國家を作つた、本當の各々の生活に迄徹底する意義が、達せられるのでないかと私は期待してをる次第であります。

建國一年に致しまして滿洲國は自國の經濟建設に關する方針を聲明して、關係方面の協力を望んだ譯でありますが、その建國一年にして聲明致しました經濟建設の大方針といふやうなものに付きましても、唯單に大きな國民經濟をどうするかいふやうな事柄ばかりでなく、私經濟、個々の私生活に關して迄方針を示してをる。その本氣な、周密なる熱意に對しては、滿洲の建國を政治的に軍事的に助けた我が帝國として、正に滿洲三千萬民衆の、本當の福祉を増進させる爲に、その建設に協力を惜しむことは出来ない。經濟建設に本當の協力を全うすることに依つて、滿洲建國の政治的意義も、

茲に有終の美を結ぶのであるといふ風に、私共は考へた次第であります。

聊か餘談に互るかと思はれますが、滿洲建國の當初に於ける、建國の實際の第一線の責任に任じました人々の熱心、晝夜を分たない熱心に對しては、非常なる尊敬を拂はなければならないと今でも省て思つてをるのであります。唯、今でも言はれてをる關東軍イデオロギー、一言にして申しますならば非常なる統制經濟、而もその經濟の根本精神と致しましては、從來の自由競争、資本主義に依る營利を本位とする經濟觀念を打捨て、大衆の利益を目的として、所謂公共的な奉仕的な企業精神に依つて、經濟を發展させ、そこに非常なる統制を行はう、滿洲といふ新たな國が出来たのだから、こゝに一つ本當に新しい經濟機構を打立てやうといふので、非常な熱を以て邁進した譯であります。この事柄は、所謂ソヴェートの如く共産的になるのではなく、今迄の資本主義の弊害である營利本位の觀念を捨て、奉仕的な企業、それと又自由競争に依る弊害を是正する爲に、非常なる統制を加へた經濟機構をこゝに打立てやうといふことで、非常なる熱心を以て脇目もふらず、一時は無茶といはれる迄に進まうと致したのであります。唯この事に付きまして、今日然らば所謂關東軍イデオロギーがどれだけ現實の形になつて現はれてをるかといふことになると、正直に申しますならば、當初の勢は劣へまして、關東軍イデオロギーに依る經濟建設の工作は退却したと白狀して宜いと思ふのであります。

何故それでは退却したかと申しますならば、先程も申しますやうに、滿洲從來の經濟は甚だ無茶な、中國の從屬的經濟であり、而も擗取軍閥の自由に攪亂した經濟ではありませんが、三千萬の民衆が長い間生活をそこに續けて來た。而も國家といふ考が比較的鈍く、自分で自分を護り、自分を治めて行かなければ、到底自己の安固を期せられないやうな状態の下に、非常に大きな資本主義經濟に依る營利は出來ない迄も、爾來利己的の考に依らなければ立つことの出來ない長い間の社會状態の續いたその滿洲を基礎として、——何にもない所に新しいものを立てるのなら容易に出來ますけれども、それを基礎として、そこに本當の新しい飛躍的な經濟機構を建てやうと致しました爲に、無理がいつたのみならず日本帝國の内部に於ける社會改造に付て非常な進んだ工作が加へられないで、唯滿洲の一角に於て、新たなる經濟機構を作らうと致しましたが、滿洲の經濟は滿洲だけの端的の經濟ではない、殊に政治的に日滿不離不可分の關係に依つて、滿洲國を指導して行かう、經濟に於きましても滿洲國の經濟といふものは、從前の滿洲國の出來ない前に於ても、その經濟は他の經濟に依存した經濟であつた。大豆に致しても、その大部分が滿洲から見ても海外に出ることによつて立つて立つてをたつた經濟、世界に依存してをる滿洲經濟、殊に日本帝國と新國家建設の緊密不可分の關係に依つて、その經濟交流に於ても、本當の一體となつて、日本の滿洲であり、滿洲の日本である、所謂夫婦の關係と同じである。

ベター・ハーフである。そのベター・ハーフの一方が、從來の家の建方のまゝ甚だしき改造を加へないのに、他方が非常なモダンな家を作らうとしても、それは出來る相談ではない。

併しながらこの關東軍イデオロギーに依つて新經濟機構を打立てやうとした努力が無駄であつたかといふことを考へますと、決して無駄ではなかつた。斯の如く頽廢し、斯の如く亂脈になつた滿洲國の經濟がこゝに確立し、殊に國民全般に國家といふ意識が宣揚したことは、一に關東軍のこの努力に依つて出來たものであり、又日本の内地に於ける資本主義經濟、自由競争に依り今日迄發展して參つた經濟に於ても、國家の非常時の状態克服の爲に非常に關心を持たなければならぬといふので、統制經濟の必要に付て非常なる關心を朝野が持つやうになり、のみならずその企業の状態に於ても、營利本位の態度に關して、唯自己の營利のみを意とすべきでない、自分を利し他を利する公共的な觀念に立脚しなければならぬといふ、精神的な非常な刺戟を與へた。これは單に滿洲に於て關東軍が新たなる經濟機構を打立てやうと、滿洲國を指導することに努力しただけの結果ではなく、世界の大事と日本立場といふことから流れ出た結果とは考へられますが、少くも關東軍が斯の如く非常なる努力をした、その現れがこゝにも効果を齎らしたといふことは、否めなまいと思ふのであります。

斯様な状態に於きまして、今後滿洲國が如何に立派になつて行くかといふことを振返つて見ます

と、事變突發の直後に於きましては、正に混沌たる状態でありまして、翌年の三月滿洲國を建國するといふ状態に至る迄の間、恐らく滿洲に在る三千萬の民衆は、日本が軍閥の勢力を驅逐したことに對しては、晴れやかなる將來が來るといふことは期待は致しましたけれども、果してその期待が裏切られずに済むのであるかどうか、もう少しひどく申しますならば、兎にも角にも非常な搾取はせられ、無茶苦茶な政治はされたけれども、兎に角自分達を治めてをつたそのものを打倒し驅逐して、さうして兵匪は各地に横行し、混亂の状態に陥つて、拾收がつくのであるかどうか、親切に日本がやつて呉れたのには違ひないが、えらい迷惑なことをやつたものだといふ風に、恐らくは考へたと思ふのであります。で建國が出來ましても、果して建國の將來が順調に行くかどうか。單に馬占山が裏切つたといふばかりでなく、馬占山と同様な考を持つた者が少くはなかつたと想像せられるのであります。それが段々治安工作が進んで參りますし、遂に帝制を實施して、國體がこゝに確立するといふことで、安心して、もうこれで國家としての將來は安心だといふことに皆が考へて來た。

而もそれに致しても、尙ほ且つ日本の國際間に於ける地位實力に對する本當の確乎たる信頼が出來てをりませぬ爲に、或はソヴェートとの間に緊張した状態になつて參ると、民心は、日本はなるほど立派なものに違ひない、舊張學良を追拂ふだけの力はあつたにはあつたが、ソヴェートと打合ふ時に、

果して我々は日本と抱合つてをつて安全なのであるかといふ心配を持つ。又更にアメリカとどうかといふ話を聞けば、果して日本がアメリカに打勝つて、どこ迄も滿洲人が安心して日本人にたよつて行つて宜いのであるかといふ危惧の念を一部には持つてをつた。然るに日本の聯盟に對する態度、又軍備縮小會議に於ける態度を見、殊に最近に於て中國の日本に對する考へ方の轉向、又北鐵交渉が進んで、遂に纏まりましたが、進んで來たといふ諸般の情勢から、唯國家として立つて行く國內の將來に於ける安心といふ外に、對外的にもう日本と手をさへ握つてをりまして、大丈夫だといふことで、本當の安心がついた譯である。昨年末地方制度の改正が出來まして、滿洲の政治行政が中央集權の實を收めることが出来るやうになりましたことも、餘りになだらかに參りました爲に、大した問題でないやうに考へかもしられませぬが、國內に於ける政治上の不安がなくなり、對外的に日本を信頼してさへをれば大丈夫だといふ安心がついた、この二つの流れの中に、日本の指導にたよつて行くより外に國家を健全にして行く道はない、いざとなれば狭い所にも立籠つて、自分だけでも守らなければならぬといふ吝な考を一掃して、滿洲といふ一つの國家を本當に守立てゝ行くといふ氣分が滿洲の上下に漲つて來た結果、あれが出來た譯であります。

恐ろしいものでありまして、もう腐つて墮落してをつた滿洲も、こゝに新たなる國家が出來、新た

なる國民經濟を打立て、行かうといふ氣運になりますといふと、それが地方の民心に迄及びまして非常なる喜ぶべき状態になつてをるのであります。先般も滿洲協和會の主權に係る日本觀光團が出来まして、こゝにやつて参りましたが、その團員に加はつてをる人々の顔付を見ますと、蒙古の人もをり、ずつと北の方の人もをり、又東の方のウスリーの沿岸の方の人もをります。又熱河の人もをり、滿洲の凡ゆる地方からやつて参つてをります。さうして年齢を見ても、僅に二十歳位の若い人がをるかと思ふと、六十歳位の老人も混つてをる。斯ういふことは従前の滿洲では夢にも見られぬ。それら各地の凡ゆる階級の人、夫から年齢も色々違つた人が、新興滿洲國の將來の發展に資する爲に、友邦進んだ日本を見學して、將來活動の參考にしやうといふ考は、従前の滿洲ではなかつた。正に國が新しくなつて、青年滿洲が新興の氣運に燃えてをるといふ風に私は觀取するのであります。

さういふ點から申しますと、日本が國運をかけてこの非常時を乗切らうとしてをるこの時に、もう少し我々としても奮發しなければならぬと考へる。唯單に大きな顔をして、滿洲は俺の力がなかつたならば出来なかつたんだぞ、俺は前達の兄貴だぞといふ顔ばかりして満足してをれば、遂には日滿を結んで而もアジアの全體を擴充させる爲の大きな理想を持つて打立てた日本が、日滿を結ぶことに成功を收めることが出来ないのみならず、滿洲が立派になるより先に、日本の内輪が腐るといふやう

になりはせぬかといふ心配もするのであります。

只今申しました日本の力がなかつたならば、如何に三千萬民衆が要望し、三千萬民衆の總意として滿洲國がこゝに建設せられたのでありますけれども、日本の支援日本の力がなかつたならば、滿洲國の建設は出来ない、將來に於てもこれの完全なる發達は出来ないといふことは、事實上争はれないこととありますが、この事柄にばかり頭を向けて、徒に我々個人々々迄が滿洲の人々よりも勝れてをるといふ優越感に驅られて、滿洲に臨むことになれば、必ずや良い結果は來さない。本當の青年滿洲國が新興の氣分に燃えてをるのに向つて、親切なる兄貴の心を以て導くなら宜いが、唯威張つて俺の方が偉いのだぞといふことならば、十年を俟たずして日滿の政治經濟上の結付は形の上で出来ましても、精神的に兩方が離れるといふ結果になるのを心配するのであります。それが爲には我々の特徴とし、彼等に勝れてをる所を益々磨いて行くと共に、我々の彼等に較べて劣つてをる所を、彼等を手本として補つて行くといふやうにしなければならぬと思ふのであります。

それならどこが滿洲の人は偉いかと尋ねになるかと思ひますが、この點に付ては特に私は最後に力を入れて申上げたいと思ひます。滿洲の經濟は先程も申しましたやうに、非常に老衰荒廢の状態にあり、而もその政治は軍閥の逆政の下にあつた。それでも三千萬の民衆は、今日迄生活を持続し、相

當の經濟的發展を遂げてをる。それは寧ろ我々としては恥かしい位である。事々に官の指導、官の補助、色々新しい事業をするのに官の補助とか何とかを叫ぶ我々から見れば、彼等は軍閥の非常なる搾取の下に、又先程申しましたやうな中國に從屬したやうな、極めて貧弱なる經濟的條件の下に於きまして、自己生活を持続し、經濟的發展を遂げて來た。そこには自ら守り自ら治め、而も個人と個人との信用を重んじて、行政的に見た自治制度はありませぬけれども、各々の信用を重んじて結合つて行く。如何に滿洲人が勤勉であり、力が勝れてをりましても、個々の力では到底斯の如き不利なる條件の下に生活を營み、經濟を構成してをることは出來なかつた。十家長とか百家長とか、小さな單位に於ける結合が誠に羨ましいばかりによく行つてをる。從來軍隊が行動致しても、又色々の官憲の者が參りましても、それらが旅費も何も持たずに來るのを地方的に養ふ。商務總會といふものが總てのものを出す。さういふ風に官の指導も補助もなしに、逆に官からものを取られるばかりでありながら、自ら立つて行く。この非常なる個人としての偉さに對して尊敬を拂つて、相互に理解して、唯滿洲は日滿不可分の關係に在るのである、日本の生命線である。であるからそこにをる者を可愛がらなければならぬ、大切にしなければならぬ、手を握らなければならぬとばかり抽象的に見ず、向ふの本當の勝れた所に對する理解を持つて、その理解に基く尊敬の心を以て、結合つて行くといふこと

が、本當の日滿議定書の趣旨であり、又聯盟を離脱するに當つて下された御詔書の本旨を貫く一番の元であると思ふのであります。

假令政治的に只今のやうな緊密な關係が出來、將來經濟の提携が益々密接になりましても、精神的に日滿兩國の民衆の心持が離れるといふことになりますれば、折角の今迄の努力も畫餅に歸する。その意味に於きまして朝鮮半島の立場、朝鮮の民衆の今後の向方、又滿洲に行つてをる朝鮮同胞の動向が如何に大切なものであるかを私は痛切に感じて參つた次第でございます。

甚だ詰まらないことを申し上げましたが、今日は色々理窟とか、或は事實に基く説明的のことを申し上げた譯でなく、唯自分の感じを申し上げて、折角何か言へと言はれた責めを塞いだ次第であります。却つて恐縮致しました。(拍手)

——終り——

昭和十年四月二十五日印刷納本
昭和十年四月三十日發行
(非賣品)

編輯兼發行人 篠崎嘉郎

印刷人 島連太郎

印刷所 三島秀太郎

東京市神田區美土代町十六番地

東京市麹町區丸の内三丁目十四番地

發行所 日滿實業協會

電話丸の内(28)三五番一三八番
振替貯金口座東京四五八〇二番

